

「一定のめど」主観的判断優先の姿勢は民主主義の対極



元経済企画庁長官
田中秀征(70)

——今回の菅首相への不信任案提出と否決の本質をどう見ますか。

当日の朝方まで可決の可能性が高く、否決でもぎりぎりだったでしょう。どちらにしても退陣するほかはなかった。採決直前の鳩山さんとの会談は、首相にとって「渡りに船」というより「救命ボート」に近いものになったでしょう。結果は「甘い人」が「ズルい人」にしてやられたという印象です。しかし、首相の信用は地に落ちてしまった。これでは今後の政権を運営することはできません。そもそも、政治の舞台が

大きくなるほど小策は通用しない。菅流政略は党の代表になるまでは効果があっても、首相になってからはマイナスになるだけです。なぜなら、首相とはほとんどの国民に言動が注視されているので、能力や性格をつぶさに見抜かれるからです。本人さえ気付いていない性格的特性まで多くの人が理解してしまう。今回の一件も「やっぱり」と思った人が多かったでしょうし、弁解や説明をすればするほど不信感は強まるのです。鳩山さんが菅首相を「ペテン師まがい」と言うのも無理からぬことです。彼はこんな言葉を使わない人だからよほど腹に据えかねたのででしょう。しかし、彼の言動にも疑問があります。なぜ首相との会談に出掛け、代議士会で首相に確認しなかったのか。その前の首相

の話には、退陣の時期どころか退陣という言葉もなかった。私は「鳩山さん、やられたね」と思いました。私が知る限り、鳩山さんは、だまされることはあっても人をだますことはない。「復興基本法と2次補正編成のめどが立ったらお引き取りいただく」と迫ったのに対し、首相が「それは結構」と言ったというのは確かでしょう。「退陣」などを文書化しなかったのは、首相に対する礼と友情だったと思います。それを逆手にとられたので怒り心頭に発したのでしょう。

首相側は、前夜まで「解散する」「除名する」と威嚇したと伝えられています。でも大震災対応の中で解散したら、首相は独裁者と呼ばれるリビアのカダフィ大佐以下の指導者になるし、自分の選挙も安泰ではない。私は解散は限りなくゼロに近いと思っていました。

——発災後の首相の対応をどう評価していますか。

とにかく、人気と信用がどん底にある指導者によって危機を乗り越えなければならぬことが何よりの不幸でした。首相は昨年参院選の惨敗によって、実質的に国民から不信任の評価を受けています。私はその時から辞めるべきだと公言してきました。「ねじれ国会」の出現もすべて彼に「国家的危機に立ち向かうために必要な国民の結束力は、トップの人気や信頼感で大きく左右されます。危機に臨む菅政権は言わば「指揮者のいないオーケストラ」です。奏者はそれぞれ持ち場で全力を尽くしているが、指揮系統が不明だから演奏が乱れてしまう。

みなが頑張っているのに、指揮者は存在を示すために予告なしに勝手にタクトを振る。これでは直ちに指揮者を代えてという声が大きくなるばかりです。

指導者は平時において信頼を蓄積しておかなければ、危機に際して国民的協力を得られない。有史以来の政治の鉄則でしょう。皮肉なことに、首相は不信任案をめぐる勝負に勝ったつもりでいても彼の本質をすべてさらけ出してしまったわけですから、さらに急失速する事態は避けられません。

――首相は「震災復旧・復興、原発事故の収束に一定のめどがつき、やるべき役割を果たせた段階で責任を引き継ぎたい」と言いながら、「退陣」を否定するかのような発言もしています。

「一定のめど」の判断をするのは首相自身でしょう。それでは受験生が自ら採点するようなもので、こんな不見識な発言はありません。統一地方選挙でも世論調査

でも民意によって間接的に退場勧告を受けているのですから、それでも続投し続けるのと、選挙って何だ、民意や民主主義って何だとなる。自分の主観的判断を最優先にする姿勢は、民主主義の対極にあります。

菅さんはマキャベリスト、俗流解釈すると「月のためには手段を選ばない人」と批判されます。ですが、その目的は明確ではなく絶えず変わる。鳩山さんの場合は季節が移り変わるように緩やかに変わるが、菅さんは昼と夜のように一気に、あるいは不連続に変わるから戸惑ってしまう。鳩山さんの目的は何となく理解できるが、菅さんは突然真逆を向いて走るような印象で信頼できないのです。

――一方で、首相は後継に「若い世代を」と強調しました。人材はいますか。

わざわざ「若い世代」と言うところに違和感があります。鳩山、小沢、あるいは仙谷由人氏などをあえて

排除しているように受け取れます。菅さんは、自分よりも小沢さんや鳩山さんよりもっと不人気だと思いついでいるのでしょうか。だから2人を敵に回せば大きなプラスだと思っているのかも知れない。だけど、もうそんな段階ではない。多くの目は菅さんの権力欲に注がれているので以前とは状況が違ってきています。また、若いだけではダメと思う人が多い。ことさら「若い世代に」と言うのと、むしろ「あざとさ」を感じる人が多いことに気付くべきです。

小沢さんはもう、菅首相が辞めれば自分も辞めてもいいという心境ではないですか。菅さんが辞めて政界を引き、一緒に小沢さんや鳩山さんが辞めればみんな大歓迎でしょう。

後に続く人が誰かと言わなくても困りますね。帯に短したすきに長しの感があるから、民間で信頼され、業績を上げた人に政界入りしてもらって展開せざるを得

ないでしょう。

今のようないきな変動期には、職業政治家では限界があります。長年、選挙や政局を優先して生きてきた人は構想力が衰えている。

もう「政権交代」とか「二大政党制」のような空虚な言葉に踊らされる時代は過ぎました。自民党と民主党という画用紙の裏表を使い切ったわけですから、全く新しい展開が必要です。

ただ、今回改めて思い知らされたのは、被災者をはじめ被災地域の首長の判断力は国政レベルを上回っていることです。国の土台がしっかりしているから政治も経済も再建は可能です。

大政党ばかりでなく、東京電力などを含めて大きな組織の指導者の劣化現象は極まっています。それが分かったことが、再発のまたとない契機になるでしょう。

構成／本誌・大場弘行
村田久美 直木詩帆

内閣不信任案をめぐる騒動で一番際立っていたのは、具体的な政策的失策（たとえば93年の宮沢喜一元首相の場合は政治改革への取り組みだった）ではなく、首相としての資質が問われたことだろう。岩見隆夫元編集長は「戦後52回の不信任案で首相の資質が問われた初めてのケース」と指摘した。性格と言ってもいいのではないだろうか。

宮沢氏の側近で、93年の細川連立政権樹立時に菅首相と行動をともにした田中秀征氏は「首相は勝負に勝ったつもりでも本質をさらけ出した」とみる。確かに、首相の座に居続けることが目的と見られていた首相は、「退陣約束ない」と強調することで見方を裏付けてしまった。資質や性格はすぐに変えられないから、辞めるべきだとかねて考えていた。（山田道子）